広がる「お墓の墓」

「子供に引き継げない…」縁故無い場所へ

ドキュメント日本

故郷にある先祖累代の墓をどうするか、が都会で暮らす人の共通の悩みになって久しい。住居近くへの改葬や納骨堂の利用が一般化するのに伴い「墓石解体業」がビジネスとして広がりつつあるという。業者に引き取られ、縁もない場所に集められる墓石がどんどん増えている。「お墓の墓」が映す現代とは――。

（大元裕行）

三重県西部に位置し、奈良と県境を接する名張市。林の中の舗装もされていない道を進むと、突然視界が開け、ぎっしりと墓石が並ぶ一画に行き当たった。墓石解体業の美匠（奈良県橿原市）が運営する「永代供養安置所」。御影石、大谷石……。種類の違う石材が色のコントラストをつくる。形も一般的な直方体から円柱状のものまで多種多様だ。

江戸時代の元号が読み取れる墓碑や題目、称名が刻まれて宗派が分かる墓石、旧陸海軍の戦死者のために造られた墓石も。一つ一つを見れば、かつては家族の歴史を子孫に伝えるものとして大切に守られていたことが感じられる。

美匠が運営する「永代供養安置所」には5千基の墓石が並ぶ

美匠の中西あざみ社長（41）によると、10年前、500坪の土地に設けた安置所には約5千基が集められている。「子供に引き継げないから墓じまいをしたい」「墓石の処理に悩んでいる」などの問い合わせは年間1千件に上る。間もなく、スペースは埋まり、近隣の土地で拡大する方向だ。

これまで21都府県の個人や石材店などから墓石解体の依頼を受けてきた。墓の一番上に置かれる竿石（さおいし）は1基1万円で受け取り、クレーンを使って安置所に運ぶ。定期的に清掃し、僧侶が供養する。中西社長は「色々な経緯がある墓石ばかりだが、誠意を持って接している」。

厚生労働省の「衛生行政報告例」によると、墓の移転や墓じまいの際に必要な改葬の許可件数は2017年度、全国で10万4493件。5年前と比べ約3割増えた。都市への人口集中と人口減が墓じまいを選ぶ人の増加に拍車をかける。

核家族化が定着した1980年代には墓じまいの動きが出始めたとされ、愛知県豊田市の妙楽寺は約40年前から墓地から撤去された墓石を引き取ってきた。その数約2万基。境内の山を切り開いた斜面に整然と墓石が並んでいる。当初は年間5～6件の相談だったが、最近は年200件にまで増えた。「2万基には2万通りの個性があり事情がある」。住職の鈴木政彦さん（58）は毎月25日の読経にそんな思いを込めている。

きちんとした扱いを受ける墓石ばかりではない。三重県内のある地区には、廃車や山積みの廃家電と一緒に大量の墓石が置かれていた。「供養地」と書かれた張り紙があるものの、雑草が生い茂り、供養されているようには見えない。

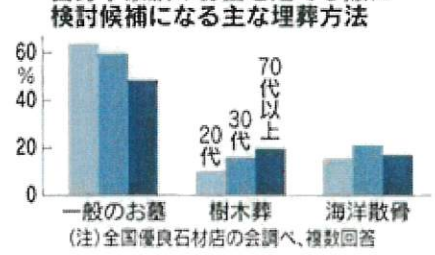
処分を請け負った業者が不法投棄するケースもあり、これまでに兵庫県や茨城県、宮城県などでは廃棄物処理法違反容疑で業者が逮捕された。「摘発は氷山の一角。不要な墓石で稼ごうとする悪質業者は全国にあふれている」（関係者）

かつて墓は家族や親戚を結びつけるモニュメントの機能を果たした。「役割はとうに過去のものになってしまったのか」。お彼岸の時期、所狭しと並んだ墓石の嘆きを聞いたような気がした。

悪質業者 不法投棄も

一般社団法人全国優良石材店の会（東京）が2018年、20代以上の男女約3千人に行った調査では、若年層の方が理葬のあり方に対して保守的な考えを持っている傾向が判明した。「自身や家族のお墓を建てる際に検討候補になる理葬方法」を聞いたところ「一般のお墓」と答えた人の割合は20代が63・8％、30代は59・5％。60代の45・9％や70代以上の48・3％より10ポイント以上高かった。

木の根元に遺骨を埋める「樹木葬」は20代10・1％に対し、70代以上は19・6％。「海洋散骨」が20代15・5％に対し、40代～60代が約20％で、中高年の方が理葬方法の多様化に理解を示した。「墓じまいの印象」については「先祖に申し訳がない」と答えた20代が全体平均よりも3・6ポイント高く「後ろめたい」も5・4ポイント高かった。「墓がないと故人に会いたいときに会えない気持ちになりそう」（20代女性）などの理由があがったという。



（注）全国優良石材店の会調べ、複数回答

中高年、理葬多様化に理解